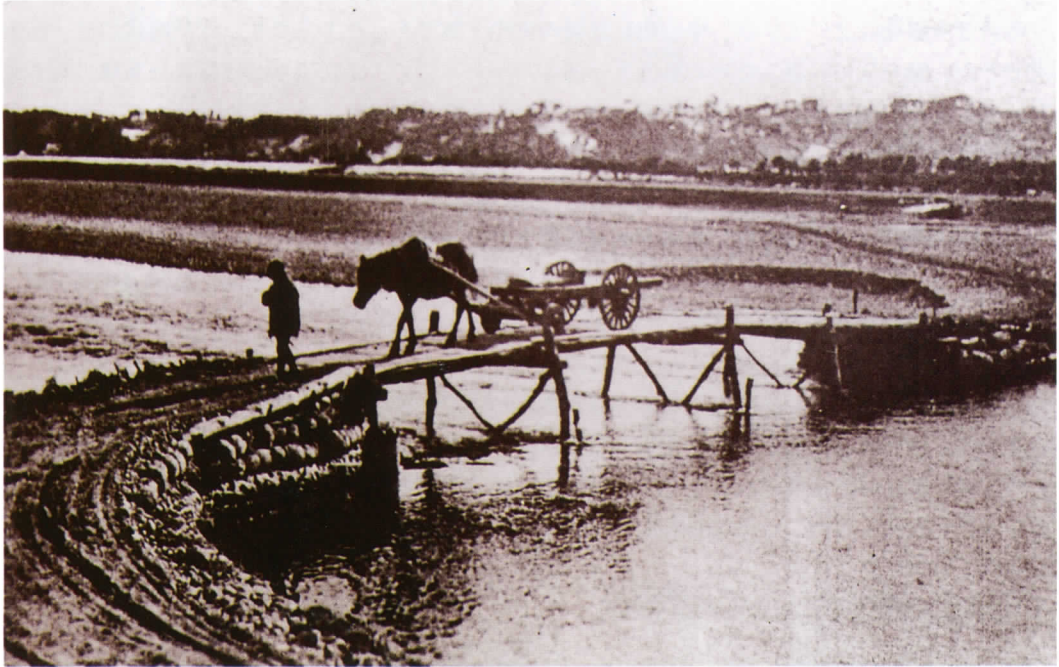


とせんば
多摩川の渡船場

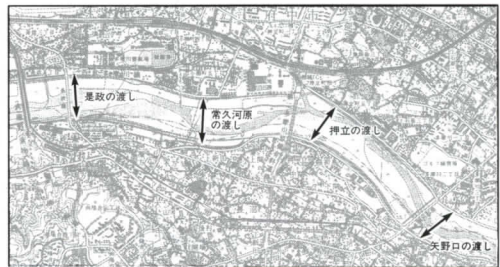
—稲城地域を中心として—

稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 1998. 9. 25



冬の矢野口の渡し・昭和初期撮影（調布市郷土博物館提供）

多摩川には現在ではいくつもの橋が架かっていますが、橋が架かる以前は渡し船による往来が交通の中心でした。この渡し船による往来の場所を渡船場といい、多摩川流域では、上流から下流に至るまで約40か所の地点に渡船場がつけられていました。渡船場の成立は、古いところでは中世末まで逆上るといわれ、昔から人々や物資の運搬に重要な役割を果たしていたことがわかります。



稲城市域の渡船場

稲城市域を見ると、稲城と府中・調布間に4か所の渡船場がありました。上流からは是政の渡し、つねひさがわら常久河原の渡し、押立の渡し、矢野口の渡しの4か所です。このうち是政、押立、矢野口の3か所は人や物資の運搬に利用された一般的な渡船場でしたが、常久河原の渡しのみは対岸の耕作場へ行くための個人的なさくばわた作場渡しで、一般の乗客を対象としたものではありませんでした。

是政の渡しは、是政橋が架かる以前にあった渡しで、現在の稲城市大丸と府中市是政を結びました。渡船場の位置は多摩川の流路が替わるたびに、是政橋の上流及び下流の付近をたびたび移動していますが、是政橋のすぐ下流の位置が最も中心であったようです。昭和17年に木造の是政橋が架かり、是政の渡しはその役目を終えて廃止されました。是政の渡しは、橋が架かる以前は

稲城から府中方面へ出る時の最も重要なルートとして利用されてきました。

押立の渡しは、島守神社の下流約150m付近に設置されていた渡船場で、現在の稲城市押立と府中市押立町を結んでいました。昭和10年に下流に多摩川原橋、昭和17年に上流に是政橋が架かり、しだいに需要が少なくなりましたが、昭和20年代半ばまで続けられました。農作物の運搬や対岸の押立本村に通う人々によって利用されました。

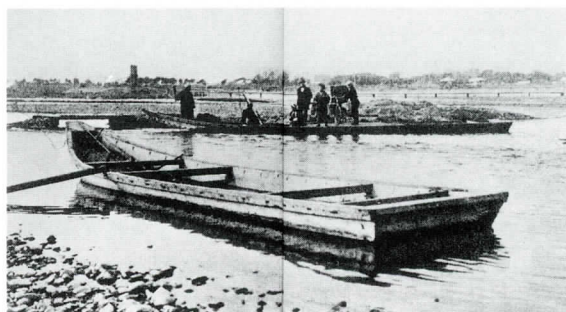
矢野口の渡しは、東京方面への農作物の運搬のために盛んに使われた渡しです。現在の稲城市矢野口と調布市多摩川を結び、渡船場の位置は多摩川の流路変更のたびに多摩川原橋の上流及び下流付近を移動していますが、中心的には橋のやや下流であったようです。江戸時代には、相模川でとれた鮎を江戸へ運ぶための鮎担ぎが通るルートとして、また明治時代以降は多摩川梨の運搬ルートとして利用されました。昭和10年の多摩川原橋の開通により、その役目を終えましたが、多摩川原橋の下流約1kmの稲田堤のところで下菅の渡しと統合されて、新たに「菅の渡し」と名称をかえて昭和48年6月まで続けられました。この渡しは多摩川最後の渡しとされています。

渡船場で使われる川船には、馬車や荷車を渡す大型の馬船（大船ともいった）と、人や自転車、荷物などを中心に乗せる小型の伝馬船がありました。馬船は長さ6間～8間（約10.9～14.5m）、伝馬船は長さ5間～5間半（約9.1～10m）の大きさで、それぞれ1～3人の船頭が立って、竿を用いて操船しました。またこれらの川船は専門の船大工が造っていました。

渡船場には、かんたんな棧橋と船頭小屋があるだけで、客はそこに集まって料金を払って乗船しました。渡し賃は昭和初期で一人1～2銭程度といわれます。船の出発時間は特に決まっておらず、客が集まると出発したようです。渡船場には冬の渇水期になると川幅が狭くなった所に仮橋が架けられましたが、この場合も通行料金がかかったようです。



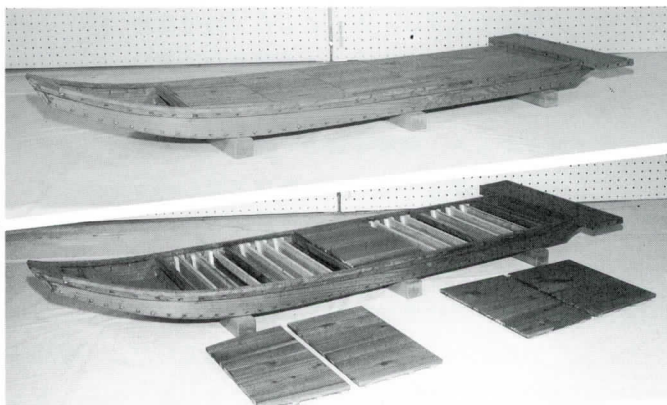
大正初期夏の押立の渡し（多摩川は語るより）



昭和初期冬の是政の渡し（南武線名勝絵葉書）



船頭小屋（菅の渡し）



多摩川で使われていた馬船の模型